

11人の 聖火ランナー



- ①山田 邦子さん (61)
- ②伊藤 敏郎さん (54)
- ③佐藤 文哉さん (34)
- ④田中 二郎さん (46)
- ⑤小笠原 正吉さん (46)
- ⑥間瀬 慶蔵さん (43)
- ⑦伊藤 明人さん (34)
- ⑧大川 育男さん (58)
- ⑨寺崎 勉さん (67)
- ⑩橋浦 公一さん (32)
- ⑪長谷川 光希さん (14)



災害公営住宅山田中央団地前で復興を支えてくれた皆さんに向けて「ありがとう」の気持ちを伝えるタオルを広げる山田小の児童たち。住宅のベランダからも応援する住民の姿が見られました

つなぐ へ発信

本県での聖火リレーは、全国で39番目の都道府県として、6月16日から18日にかけて28市町村を巡るルートで行われました。2日目の17日は、沿岸被災地8市町村を巡り、本町は、県内で

東京2020オリンピック聖火リレーが、6月17日に町内で行われ、本町の復興ふるさと大使の山田邦子さんを含む11人の聖火ランナーが復興した町並みを巡る約2.17^{km}の道のりを継走しました。東日本大震災から10年の節目の年に、被災地の今の姿を伝えながら全国各地121日間をかけて巡る同聖火リレー。沿道に駆け付けた町民約2千人は、聖火の行方を見守りながら、大きく手を振り復興を支えた方々への感謝の気持ちを国内外へ発信していました。県内では、16日から3日間にわたり、約64^{km}のコースを284人がつないでいます。

スタート地点の中央公園では開会セレモニーが開かれ、山田町第一保育所の園児13人による愛らしくも勇壮な虎舞が会場を盛り上げました。あいさつに立った佐藤信逸町長は「焼野原だったこの場所です、今日の日を迎えることができると誰が想像できたでしょうか」。多くの方々を支えられて来たことを忘れてはならない」と述べ、聖火リレーを機に改めて復興支援への感謝をしようと呼び掛けました。

復興ふるさと大使の 山田さんが第1走者

13番目です。町内の走行距離は中央公園から織笠駅までの約2・17^{km}。金融機関や商業施設などが集約された陸中山田駅前、災害公営住宅山田中央団地前を通り、高さ約10^mの防潮堤が立つ国道45号を南下した後、織笠地区の高台住宅団地方面へと向かうルートです。震災後に新しく整備された施設などを経由することで、当時の壊滅的な状況から立ち上がった町の今の姿を世界へ発信する機会となりました。



開会セレモニーの中で復興支援への感謝を伝える佐藤信逸町長



いきいきとした虎舞を披露する山田町第一保育所の園児たち





第1走者 山田 邦子さん
(タレント・山田町復興ふるさと大使)

“笑顔”のバトンリレーに

「私にふるさとを作ってくれてどうもありがとうございます」と、明るく元気に登場したのは、タレントの山田邦子さん。山田町復興ふるさと大使として、町のPRに尽力していただいています。

「コロナ禍で悩みましたが、この10年は山田町と私の歩みでもあります。その節目の聖火リレーは特別なものです」と今回の参加を決めました。今の町を見た感想を尋ねると「人の力は本当に素晴らしいなと思います」と復興した町並みを見詰めます。本番前は「町の人々へ笑顔のバトンリレーができればと思います」と話していた

山田さん。開会セレモニーに登場すると持ち前の明るさと笑いを誘うトークで会場は大盛り上がり。笑顔いっぱいスタートを切り、聖火の火だけではなく、しっかりと「笑顔のバトン」もつなぎました。



拍手の中、聖火を手にスタートを切る山田邦子さん

東京2020五輪
町内聖火リレー

11人が2.17^キを走り

復興の姿と感謝 世界

らせていただきます。山田町大好き」と意気込み、聖火の火がトーチに移されると、会場からは大きな拍手が送られました。午後2時27分の出発時刻には「鎮魂と希望の鐘」の音と虎舞のおはやしを合図に駆け出し、記念すべき聖火リレーがスタートしました。

11人のランナーは、沿道からの応援に笑顔で応じながら走行し、トーチを近づけて聖火を渡す「トーチキス」では思い思いのポーズを取りながら次のランナーに聖火の火を引き継いでいきました。

沿道に町民約2千人
手旗などで走者応援

沿道には、町民約2千人が駆けつけ手旗などを振りランナーを応援。災害公営住宅山田中央団地前では山田小学校の児童たちが「ありがとう」と記された専用タオルを両手に、町の復興を支え、見守っていた。沿道には、町民約2千人が駆けつけ手旗などを振りランナーを応援。災害公営住宅山田中央団地前では山田小学校の児童たちが「ありがとう」と記された専用タオルを両手に、町の復興を支え、見守っていた。

コース内に流れる軽快な音楽や色鮮やかに裝飾されたスポンサー車両の演出が来場者を楽しませるなど、オリンピッククムードを高めていきました。

次ページへ続きます。

音楽やダンスでリレーを盛り上げるスポンサー車両とそれを楽しむ山田小の児童たち



聖火をつなぎポーズを決める伊藤敏郎さん(左)と佐藤文哉さん(右)





最終走者 長谷川 光希さん

元気な姿で感謝伝え励ましたい

当町出身の長谷川光希さんは、超低出生体重児で生まれ、現在は宮古市の支援学校に通っています。自分の成長を温かく見守ってくれた皆さんに自分の元気な姿で感謝の気持ちを伝え、同じ境遇にある子どもや家族を励ましたいとの思いからランナーに応募しました。数日前から緊張していたという長谷川さ



横断幕で応援する皆さん（マスクは撮影のため外しています）

んですが、本番はトーチをしっかりと持ち、元気にたくましく走り切りました。大役を終えた後は「力を出し切れました。沿道からの応援がとてもうれしかったです」と感無量の様子でした。



最終走者に向かい笑顔で走る橋浦公一さん



織笠高台団地入口でランナーを迎える皆さん



織笠駅線路沿いでなびく大漁旗

町全体でつないだ 聖火リレーの成功

終着地点の織笠駅では、山田中学校吹奏楽部らによる息の合った演奏が行われ、線路沿いには地域住民により飾られた大漁旗がなびいていました。最終走者の長谷川光希さんの姿が見えると、応援に集まった人々が拍手で出迎えました。長谷川さんは、聖火を織笠駅の最終地点へ運び、次の経由地の大槌町へつなぐ大役を終えました。

コロナ禍という難題を乗り越え行われた聖火リレーの成功には、町民一人一人による新型コロナウイルス感染症の感染防止対策への理解と協力のほか、舞台裏で円滑な運営を支えた人たちの存在があります。町内の住民団体や関係機関、山田高校の生徒などが、事前の環境整備や交通規制、沿道整理に携わり、沿道の応援には、保育施設や小・中学校の児童・生徒約千人が活気ある応援で盛り上げました。開催の賛否が叫ばれた歴史的イベントですが、町全体でつないだ聖火の火は、町内を明るく照らす希望の光となり「復興五輪」への機運を一層高めました。



演奏でランナーを迎える山田中学校吹奏楽部と山田吹奏楽団



新型コロナウイルス対策を呼び掛けるプラカードを手に沿道整理を行う山田高の生徒たち